

# 福井県嶺南地域における住民の 豊かさ意識に関する研究

How do residents in the Reinan district perceive their quality of life ?

酒井 幸美 (Yukimi Sakai) \*

**要約** 本研究は、福井県嶺南地域の住民の豊かさ意識を把握することを目的に実施したものである。嶺南地域の住民 45 名を対象とした集団面接(グループインタビュー)を行うとともに、福井市、大阪市を比較対象地域として意識調査を実施した。その結果、嶺南地域の住民は家の存続と地縁社会の形成・維持を豊かさとしてとらえ、地縁社会は地域活動への参加や近所付き合いによって形成された緊密な人間関係によって成り立っていること、自己実現のあり方は個人の欲求よりも帰属する社会との調和を前提に考慮されていることが明らかになり、都市的生活様式とは異なる生活様式を営んでいることが考えられた。また、衣食住には満足を感じているが、教育文化・余暇生活を支える社会基盤の整備を望んでいることが見いだされた。

**キーワード** 豊かさ、住民意識、福井県嶺南地域、意識調査

**Abstract** In this study, we investigated how residents in the Reinan district, that was the southern part of Fukui Prefecture, perceive their quality of life. Group interviews were conducted, targeting 45 residents in the Reinan district, as well as an opinion survey using the cities of Fukui and Osaka as control districts. As a result, it was found that Reinan people recognize the continuation of household and the formation and maintenance of society based on shared territorial bond as symbols of the quality of life. It was also found that close human relationships developed through people's participation in community activities and associations with their neighbors are the constituents of the society based on shared territorial bond. The survey results also indicated that in this society, self-realization is considered based on harmony with the society to which one belongs, rather than the achievement of one's personal desires. These findings suggest that people of the Reinan district are leading lifestyles different from urban lifestyles. It was also found that Reinan people are satisfied with food, clothing and shelter, but desire improvement of social infrastructure that supports education, culture and leisure.

**Keywords** quality of life; residents' attitude; Reinan district, Fukui Prefecture; attitude survey

## 1. 目的

福井県は旧経済企画庁の新国民生活指標(以下、豊かさ指標)において、平成6年から平成10年の5年間連続1位になるなど高い評価を受けてきた。豊かさ指標とは、GDPや所得など貨幣的な指標でとらえがちであった生活の豊かさに対して、非貨幣的な指標を中心に生活の豊かさを多面的にとらえるため作成されたものである。豊かさ指標では、「一

人当たりの家計所得」など約150個の個別指標データをもとに、「住む」、「費やす」、「働く」、「育てる」、「癒す」、「遊ぶ」、「学ぶ」、「交わる」の8つの活動領域を設定し、それぞれの活動領域に対して「安全・安心」、「公正」、「自由」、「快適」の4つの評価軸を用いて都道府県別に豊かさを評価した(経済企画庁国民生活局, 1998)。しかし、平成11年以降、都道府県別の評価は取りやめとなっている。

このように福井県は、統計指標にもとづく客観的

\* (株)原子力安全システム研究所 社会システム研究所

評価により豊かさについて高い評価を受けてきたが、住民の豊かさのとらえ方など、豊かさに対する意識面での調査はなされていない。

そこで本研究は、福井県、特に研究所が所在する嶺南地域の住民の豊かさのとらえ方を把握することを目的に実施した。

## 2. 面接調査

### 2.1 方法

福井県三方郡美浜町在住の22~78歳の男女計45人を対象とし、同性同年代3~5人の集団面接(グループインタビュー)を実施した。対象者の選定にあたっては当研究所の友人関係者とその紹介者とし、電力関係者を除いた。インタビューは1回当たり約90分とし、対面面接で筆記により記録した。調査は全12回、平成11年7月~平成12年1月に実施した。

インタビューでは「福井県は好きですか、嫌いですか」、「福井県のプラスイメージとマイナスイメージを教えてください」など地域に対する愛着心、「地域活動や行事に積極的に参加しますか」、「ご近所と関わりをもつところと関わりをもたないところと、どちらに住みたいですか」など地域社会との関わり、「あなたやご家族が病気になったとき、まずどこに行きますか」など社会基盤に対する満足度、「流行に敏感で刺激が多く便利で活気があるところと、流行に疎く刺激が少ないが四季を実感できる自然が身近にあり生活のペースがのんびりしているところと、どちらに住みたいですか」など都会に対する意識、「あなたにとって一番関心のある美浜町の農水産業や商業の話題は何ですか」など地域の現状について質問した。インタビューはグループの雰囲気や会話の流れによって、質問の仕方や質問順序を臨機応変に変更しながら進めた。結果は定性的に分析し考察した。

## 2.2 結果

### 2.2.1 地域への愛着心

ここで面接した嶺南地域の人は、年代性別を問わず概ね、福井県、特に嶺南地域を好んでいた。その理由は「自分のふるさとである」、「住めば都」、「山あり海ありで自然が豊か」、「のんびり」、「ほっとする」などであった。また、特に嶺南地域を好んでいる理由を嶺北地域との方言や気質の違いによって説明しており、嶺北の人は越前弁を話し、しっかり者であるが、嶺南の人は関西弁に近い言葉でやわらかく話し、人情厚いということであった。また、「嶺北の人は嶺南の人に対して優越感を持っている」など嶺北に対する対抗意識が見受けられた。

「自然の豊かさ」は福井県のプラスイメージであり、他の地域に自慢できるものとしてとらえていた。しかし、マイナスイメージには「全国的に知名度が低い」、「原子力発電所でお有名」などをあげていた。

### 2.2.2 地域とのかかわり

美浜町では集落単位での地域活動が活発に行われており、その内容は子供会、婦人会、老人会など年齢やライフステージに応じて変化しているということであった。若い人は地域活動にほとんど興味を持っていなかったが、地域の約束事として受け入れていた。壮年期の人は義務で参加しており、高老年の人は生き甲斐や楽しみで参加していた。

また、常日頃から緊密で相互扶助的な近所付き合いが行われているということであった。時間的、金銭的な犠牲や個人行動に対する制約に煩わしさを認めながらも、「嫌なことはあるがそれ以上にいいことが多い」、「助け合いをあてにできる」など隣近所との関わりを心のゆとりとして位置づけていた。

しかし、「古いしきたりにこだわって新しい発想は受けつけてもらえない」、「人の家のことに構い過ぎる」などの地域の風潮を指摘する声もあった。

### 2.2.3 社会基盤に対する満足度

衣食住など日常生活について不満の声はなかったが、社会基盤の整備については、次のような意見があった。

交通機関に対する評価は概ね低かった。バス、鉄

道は本数が少なく利便性に乏しいため、自家用車を交通手段の基本として位置付けており、その結果、交通事故の増大や交通渋滞を招いているということであった。そのため、公共の交通機関や近隣間を結ぶ道路の充実を望んでいた。高速道路や新幹線など大型交通網の整備については有用性を認めつつも、まずは日常における近隣の交通機関の改善をあげる声があった。

町内の生涯学習施設やスポーツ施設等の文化施設は、自己啓発や地域の体育行事で広く利用されているということであった。しかし、施設の種類や巨大さ、立派さの点で、嶺北地域や他の電源立地町との比較による不満があがっていた。

医療機関については、町内に総合病院がないため町内の診療所を頼りにはしているものの、対応可能な病気の範囲が限られていることに不満を訴える声があった。

介護福祉サービスに対しては昔よりも向上したと一応の評価をしているものの、決して十分ではなく、家族による介護が不可欠ということであった。親の老後については、子供が家で世話をし看取るのがあたり前で、従来の実績から心配する意見はなかった。しかし、自分の老後については「子供に世話を頼んではみるものの期待できない」、「行政のサービスだけでは不十分」、「自分の力では見通しが立たないので不安」という声があった。子供をあてにできない理由は「この辺ではできる仕事に限られている」、「子供は子供の人生」などであった。

学校教育について他地域とのレベルの差を指摘する声はなかった。しかし、不登校、いじめ、学級崩壊、塾に行く子供の増加、家庭教育の不備、先生の責任感のなさなど世間一般に伝えられている教育問題を指摘し、教育環境の悪化を心配していた。大学など高等教育の場が地域に少ないことを指摘する意見はなく、他の地域に高等教育を受けに行っても地元に対応しい就職先がないため、若者が流出することが問題となっていた。

## 2.2.4 都会に対する意識

美浜町は、東海地方や近畿地方との交通の要所で

ある敦賀市に隣接している。このような理由から、敦賀市から比較的交通が便利な名古屋市、大阪市等の大都市に度々遊びに出かけるということであった。都会に出かける理由は、趣味にあったモノの購入や娯楽などであった。しかし、娯楽施設をはじめ、情報やモノの選択肢が多いという都市の良さを認めつつも、「都会はたまに行くから良い」とし、「住むには隣近所との関わり合いがあり、自然が多くのおびりしたところが良い」ということであった。日々の生活では、新聞、雑誌、テレビ、子供から新しい情報を入手しているが、インターネットの利用はまだ少数派であった。インターネットやパソコンの利用には意欲的な声があったが、大半は女性の買い物や電子メールの利用であり、仕事上の情報入手手段としての利用はほとんどなかった。

若い人の中には、地域における情報の遅さを指摘する声があり、「やりたいことが見つけられない」、「考えが古くなるので都会に対する競争力を失う」などの意見があった。

## 2.2.5 地域の現状

原子力発電所の立地によって道路などの社会基盤が整備されたこと、雇用が拡大されたことを評価していた。しかし、地域の現状について「活気がない」と評価し、その理由は「地場産業がない」、「雇用が不足して若者がいない」、「世帯が高齢化している」などであった。しかしながら、地域を活性化するための具体的なアイデアは少なく、消極的ながら観光施設や企業誘致、特産品の開発・販売等をあげていた。町おこしは様々に試みられているものの、どれも長続きしないということであった。そして、「町は原子力発電所にお願いをし頼りにしている」など地域の発展を原子力発電所に依存する風潮を指摘しながら、自らの町民性を省みて「みんなで一致団結やろうというのがない」、「切磋たくましく生きていくというのがない」という意見があった。

また、原子力発電所の事故やトラブルに対する消費地の人々の「大げさな反応で騒ぎ立てる」といった態度が地域経済にダメージを与えるとして、他府県の人が原子力発電所をどのように見るかが心配と

という意見があった。発電所で起こるトラブルに対しては「地元は気にしていない」と静観しているものの、ひとたび事故や災害が起きた場合は生活や自然環境が破滅的なダメージを被る様子を想像していた。原子力発電所の所員が安全確保のために努力していることを評価していたものの、安全確保は当然であり、事故の無いようしっかりやってほしいという要望があった。

## 2.3 考察

インタビューの結果、美浜町の住民は日々の生活に概ね満足しており、豊かな自然と相互扶助的な近所付き合いや地域活動によって形成される地縁社会を大切にしていることが明らかになった。しかし、過疎化の進行により地縁社会の維持が課題になっていることがわかった。これらの結果より、嶺南地域の住民は地縁を基本とする相互扶助的な地域社会に基づく価値判断をしながら生活していることが考えられる。

都市と農村は地域社会の2類型といわれている。都市と農村では、集落内における共通問題の処理方法が異なっている。都市においては、個々の家族では充足できない機能や解決できない問題を専門機関に依存し一括で処理している。一方、農村では、専門機関ではなく、住民の相互扶助システムによる共同的な行動で共通の問題を処理している。このような共同生活の営み方の違いにより、前者は都市的生活様式、後者は村落的生活様式とよばれ、生活様式によって地域社会のあり様も異なるという(蓮見, 1993 ; 森岡, 1993)。

以上の観点から、嶺南地域における地域社会は村落的生活様式に基づくものと考えられ、住民は都市とは異なった豊かさのとらえ方をしているものと推察できる。

そこで、次の質問紙調査では都市と村落の生活様式の違いに着目し、嶺南地域の住民の豊かさのとらえ方を都市との比較によって浮き彫りにすることとした。

## 3. 質問紙調査

### 3.1 方法

嶺南地域の豊かさのとらえ方の特徴を浮き彫りにするため、近隣の大都市である大阪市と、福井県の県庁所在地である福江市を比較対象地域とし、これら3つの地域で質問紙による調査を実施した。調査方法の概要を表1に示す。

質問項目は住環境に対する評価、生活のゆとりと満足度、慣習や自己実現に対する意識、地域社会や自然環境とのかかわり、科学技術の利用に対する意識について作成した。

得られた調査結果に対し因子分析を行い、3つの地域に共通する因子を抽出した。そして、因子得点を用いて豊かさのとらえ方の特徴を3つの地域について比較検討した。

表1 調査方法の概要

	嶺南地域*	福江市	大阪市
調査対象者	満18～79歳の男女個人(3地域共通)		
回収数/標本数	1186/1500	1063/1500	1110/1500
(回収率)	79.0%	70.9%	74.0%
抽出方法	層化二段無作為抽出法(3地域共通)		
調査期間	平成12年11月16日 ～平成12年12月3日(3地域共通)		

\* 敦賀市, 小浜市, 三方郡, 遠敷郡, 大飯郡

### 3.2 結果

#### 3.2.1 因子の抽出

67の質問項目について探索的因子分析を行い、因子を抽出した。因子分析の方法は最尤法を用いた。因子数はスクリープロット法に基づき14因子解を採用し、因子の回転はプロマックス法で斜交回転を行った。

第1因子には「暮らし向き(家計)に満足している」、「耐久消費財の所有に満足している」、「現在の生活に満足している」など、生活のゆとりに関する質問項目が含まれたので「生活ゆとり因子」と命名した。第2因子には「日常生活での交通が便利である」、「大都市への交通が便利である」、「生活必需品

が近くで揃う」など、生活の利便性に関する質問項目が含まれたので「生活利便性因子」と命名した。第3因子には「家は代々継ぐものだ」、「(子供には)家を継いでほしい」、「家や土地等財産を子供に残すのは親の努めだ」など、家の世代継承にかかわる質問項目が含まれたので「家意識因子」と命名した。第4因子には「自然災害に備えた防災活動があれば参加する」、「住民主体のまちづくり組織があれば参加する」など、地域活動への参加意欲に関する質問項目が含まれたので「地域活動参加因子」と命名した。第5因子には「周囲の人の“昔からあるしきたりは尊重すべきだ”という意見に束縛を感じる」、「周囲の人の“家は代々継ぐものだ”という意見に束縛を感じる」など、慣習に対する束縛感に関する質問項目が含まれたので「慣習束縛感因子」と命名した。第6因子には「余暇利用施設が整備されている」、「子供の遊び場が確保されている」、「生涯教育・文化施設では幅広い講座やイベントが開催されている」という文化的環境の整備状況についての質問項目が含まれたので、「文化的環境因子」と命名した。第7因子には「新しいことを積極的に取り入れたい」、「自分の趣味を広げたり技能を高めたい」、「自分の個性を追求したい」という自己実現意欲を問う質問項目が含まれたので、「自己実現欲求因子」と命名した。第8因子には「ごみの収集・処理が適切である」、「歩道が整備されている」、「上下水道が整備されている」など、地域の安全衛生にかかわる質問項目が含まれたので「安全衛生因子」と命名した。第9因子には「マイホームに住み、家族で外食や海外旅行を楽しんでいる人がうらやましい」、「良い暮らしをしている人がうらやましい」など、うらやましいと思う生活に関する質問項目が含まれたので「羨望意識因子」と命名した。第10因子には「収入が安定した長期の働き口がある」、「地元で希望する職業につける」など、雇用環境に関する質問項目が含まれたので「雇用環境因子」と命名した。第11因子には「生活がより便利になるためには自然環境が犠牲になってもやむを得ない」、「地域を活性化させるためには自然環境が犠牲になってもやむを得ない」など、やむを得ずとも自然環境の保護より地域の開発を優先させる考え方を問う質問項目が

含まれたので「開発優先因子」と命名した。第12因子には「健康で長生きができるよう科学技術がもっと進歩してほしい」、「生活を便利にするために科学技術がもっと進歩してほしい」など、科学技術の進歩に期待し信奉する意識を問う質問項目が含まれたので「科学技術信奉因子」と命名した。第13因子には「科学技術のもたらす恩恵は一部の人々の犠牲の上に成り立っている」、「科学技術に依存した社会は、ささいな事故やミスが人間の力では手に負えないような事故につながる恐れがある」など、科学技術に対する不信を問う質問項目が含まれたので「科学技術不信因子」と命名した。そして、第14因子には「生活の時間的ゆとりに満足している」、「連続した休暇に満足している」が含まれたので「時間的ゆとり因子」と命名した。

次に、抽出した14個の斜交因子の因子得点について主因子法によって因子を抽出した。因子数はスクリープロット法を用いて4因子解を採用した。因子の回転はバリマックス法による直交回転を行った。バリマックス回転後の直交因子の因子負荷量を表2に示す。

第1因子には、文化的環境因子、生活利便性因子、生活ゆとり因子など、生活環境に関わる因子項目が含まれていた。第1因子に高い因子負荷量に着目すると、文化的環境因子、生活利便性因子の因子負荷量が特に高く、雇用環境因子、時間的ゆとり因子が低くなっていた。そこで、第1因子を“文化的生活因子”と命名した。第2因子には、地域活動参加因子、家意識因子など、コミュニティに関わる因子項目が含まれていたので“コミュニティ因子”と命名した。第3因子には、自己実現欲求因子、科学技術信奉因子が含まれていたが、科学技術に対する信奉心は自己実現欲求を満たすための手段と解釈し、“自己実現因子”と命名した。そして、第4因子には開発優先因子、羨望意識因子が含まれており、やむを得ずとも開発を優先する意識には羨望意識が潜在しているものと解釈し、“開発優先因子”と命名した。

なお、無回答など回答に不備のあったサンプルを除くと、分析対象の調査対象者は3つの地域で合計2855人であった。

表2 抽出した斜交因子を基にしたバリマックス法による直交回転後の因子負荷量

直交因子名	斜交因子項目 (斜交因子項目に対する因子負荷量が0.4以上のもの;略記)	質問文				因子負荷量				共通性
		1	2	3	4	1	2	3	4	
文化的 生活 因子	文化的環境	余暇利用施設が整備されている 子供の遊び場が確保されている 生涯教育・文化施設での講座やイベントが開催されている 大学・短大などの高等教育の場がある 保育所・幼稚園等の施設・サービスが整備されている 高齢者/身体障害者の福祉施設・サービスが整備されている	<b>0.789</b>	0.174	0.048	0.081	0.661			
	生活利便性	日常生活での交通が便利である 大都市への交通が便利である 生活必需品が近くで揃う 生活必需品が安く揃う 衣料品や電化製品が近くで揃う 金融機関が便利に利用できる	<b>0.711</b>	-0.119	-0.009	-0.033	0.521			
	生活ゆとり	暮らし向き(家計)に満足している 耐久消費財の所有に満足している 現在の生活に満足している 生活の精神的ゆとりに満足している 日常生活で充実感を感じている 住いの空間的ゆとりに満足している	<b>0.605</b>	0.333	0.025	-0.115	0.491			
	安全衛生	ごみの収集・処理が適切である 歩道が整備されている 上下水道が整備されている 犯罪が少なく治安がよい 医療施設が利用しやすく安心だ	<b>0.596</b>	0.236	-0.168	0.151	0.462			
	雇用環境	収入が安定した長期の働き口がある 地元で希望する職業につける 臨時雇いやパートタイムの働き口がある	<b>0.495</b>	-0.088	0.397	-0.066	0.415			
	時間的ゆとり	生活の時間的ゆとりに満足している 連続した休暇に満足している	0.367	0.187	-0.244	-0.025	0.230			
コミュニティ 因子	地域活動参加	自然災害に備えた防災活動があれば参加する 産業施設の災害に備えた防災活動があれば参加する 住民主体のまちづくり組織があれば参加する 社会奉仕活動に参加する	0.065	<b>0.654</b>	0.082	-0.218	0.487			
	家意識	家は代々継ぐものだ (子供には)家を継いでほしい 家や土地等財産を子供に残すのは親の努めだ 親の老後は子供がみるべきだ 昔からあるしきたりは尊重するべきだ (子供には)地域の発展に役だってほしい	0.145	<b>0.646</b>	-0.143	0.252	0.521			
	慣習束縛感	周囲の人の「昔からあるしきたりは尊重するべきだ」という意見に束縛を感じる 周囲の人の「家は代々継ぐものだ」という意見に束縛を感じる 周囲の人の「家や土地など財産を子供に残すのは親の努めだ」という意見に束縛を感じる 周囲の人の「個人の都合より地域の行事を優先するべきだ」という意見に束縛を感じる 周囲の人の「親の老後は子供がみるべきだ」という意見に束縛を感じる	-0.165	-0.394	0.349	-0.035	0.306			
自己実現因子	自己実現欲求	新しいことを積極的に取り入れたい 自分の趣味を広げたり技能を高めたい 自分の個性を追求したい 自分の生き方や考え方を貫きたい	0.035	-0.042	<b>0.666</b>	-0.062	0.451			
	科学技術信奉	健康で長生きできるように科学技術がもっと進歩してほしい 生活を便利にするために科学技術がもっと進歩してほしい	-0.012	0.244	<b>0.447</b>	0.446	0.458			
開発優先因子	開発優先	生活がより便利になるためには自然環境が犠牲になってもやむを得ない 地域を活性化させるためには自然環境が犠牲になってもやむを得ない	-0.072	-0.019	0.008	<b>0.548</b>	0.306			
	羨望意識	マイホームに住み家族で外食や海外旅行を楽しんでいる人がうらやましい よい暮らしをしている人がうらやましい 交通機関が便利に利用でき、文化施設や医療施設が充実した地域に住んでいる人がうらやましい	-0.188	-0.246	0.425	<b>0.498</b>	0.525			
	科学技術不信	科学技術のもたらす恩恵は一部の人の犠牲の上に成り立っている 科学技術に依存した社会はささいな事故やミスが人間の力では手に負えないような事故につながる恐れがある	-0.110	-0.017	0.087	-0.279	0.098			
固有値		3.22	1.96	1.64	1.33					
寄与率%		16.7	9.83	8.78	7.07					

### 3.2.2 地域間の比較

#### (1) 直交因子の比較

図1に4つの直交因子について因子得点の平均値を示す。分散分析の結果，“文化的生活因子”，“コミュニティ因子”，“開発優先因子”の因子得点に地域差がみられたが，“自己実現因子”には地域差がみられなかった(文化的生活因子:  $F(2, 2852)=122.66, p<.05$ , コミュニティ因子:  $F(2, 2852)=197.07, p<.05$ , 自己実現因子:  $F(2, 2852)=0.75, ns$ , 開発優先因子:  $F(2, 2852)=3.94, p<.05$ )。

多重比較検定の結果，“文化的生活因子”について、嶺南地域は福井市および大阪市よりも因子得点が低いことが示され( $p<.05$ )、福井市と大阪市の間に因子得点の有意差は認められなかった。“コミュニティ因子”については、嶺南地域が最も因子得点が高く、次に福井市、大阪市の順に低くなったが、3つの地域間に有意差があることが示された( $p<.05$ )。“開発優先因子”では、嶺南地域および福井市の因子得点に有意差はないが、大阪市よりも因子得点が有意に高いことが示された( $p<.05$ )。

以上、嶺南地域は“文化的生活因子”の因子得点が著しく低く、“コミュニティ因子”の因子得点がいちばん高いこと、および“開発優先因子”の因子得点が福井市と同等で大阪市よりも高いことが示された。

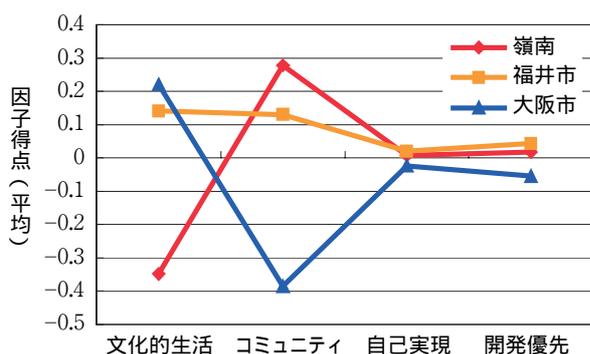


図1 豊かさについての直交因子の因子得点

#### (2) 文化的生活因子に属する斜交因子項目の比較

図2に“文化的生活因子”に属する斜交因子項目

のうち因子負荷量が0.40以上であったものについて、因子負荷量の高い順に因子得点の平均値を示す。いずれの因子項目についても地域間に有意差が認められた(文化的環境因子:  $F(2, 2852)=44.92, p<.05$ , 生活利便性因子:  $F(2, 2852)=640.69, p<.05$ , 生活ゆとり因子:  $F(2, 2852)=31.17, p<.05$ , 安全衛生因子:  $F(2, 2852)=47.02, p<.05$ , 雇用環境因子:  $F(2, 2852)=15.84, p<.05$ )。多重比較検定の結果、文化的環境因子については福井市が最も因子得点が高く、大阪市、嶺南地域の順に低くなっており、3つの地域間に有意差が認められた( $p<.05$ )。生活利便性因子には3つの地域で因子得点の差が最も顕著に現れた。大阪市の因子得点がいちばん高く、福井市、嶺南地域の順に低くなり、3つの地域間に有意差があることが示された( $p<.05$ )。生活ゆとり因子については、福井市の因子得点がいちばん高く、嶺南地域、大阪市と順に続き、3つの地域間の差は有意であった( $p<.05$ )。安全衛生因子については、福井市と大阪市の因子得点に有意差はなく、嶺南地域は他の2つの地域よりも因子得点がいちばん低いことが示された( $p<.05$ )。雇用環境因子では、福井市が最も因子得点が高く、大阪市、嶺南地域の順に低い得点となり、3つの地域間で有意差が認められた( $p<.05$ )。

以上、嶺南地域は生活ゆとり因子を除く4つの因子について、福井市および大阪市よりも因子得点がいちばん低く、いずれも負の得点であった。これに対し、福井市は生活利便性因子を除く4つの因子について、最も因子得点がいちばん高く正の値であった。

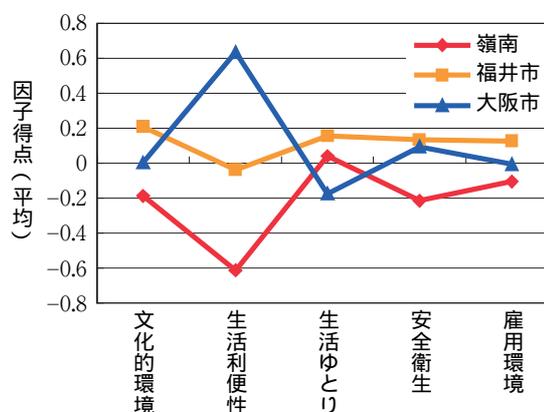


図2 “文化的生活因子”に属する斜交因子得点

### (3) コミュニティ因子に属する斜交因子項目と関連する質問項目の比較

図3に“コミュニティ因子”に属する斜交因子項目のうち因子負荷量が0.40以上であったものについて、因子負荷量の高い順に因子得点の平均値を示す。いずれの因子項目についても地域間に有意差が認められた(地域活動参加因子:  $F(2, 2852)=102.89, p< .05$ , 家意識因子  $F(2, 2852)=67.57, p< .05$ )。多重比較検定の結果、地域活動参加因子については、嶺南地域の因子得点が最も高く、福井市、大阪市の順に低くなっており、3つの地域の因子得点に有意差が認められた( $p< .05$ )。家意識因子においては、嶺南地域および福井市の因子得点に有意差はないが、大阪市よりも因子得点が有意に高いことが示された( $p< .05$ )。

以上のことから、嶺南地域は地域活動参加因子と家意識因子の因子得点が最も高いこと、福井市の地域活動参加因子の因子得点は嶺南地域よりも低いもの、家意識因子については嶺南地域と同等であることが示された。大阪市では、いずれの因子についても最も因子得点が低く、負の値であった。

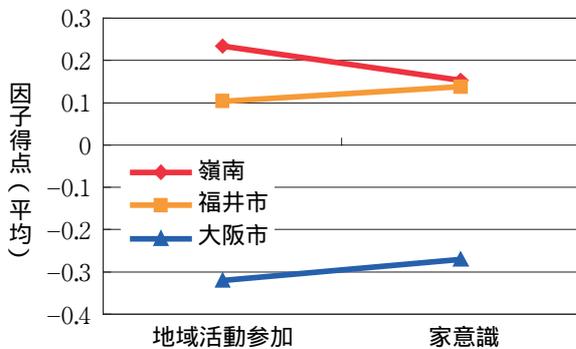


図3 “コミュニティ因子”に属する斜交因子得点

図4に、最も重要な付き合いの範囲について「隣近所・町内の人」、「職場・仕事関係の人」、「子供の学校関係の人」、「活動で知り合った友人」、「学校時代の友人」、「その他」の中から該当するものをひとつ選択する質問の結果を示す。いずれの地域でも「隣近所・町内の人」、「職場・仕事関係の人」の順に高い割合を占めていたが、嶺南地域では「隣近所・町内の人」を選択する割合が他の地域と比較し

て高くなっていた( $p< .05$ )。図5に「隣近所・町内の人」、「職場・仕事関係の人」と回答した割合を年代別に示す。いずれの地域においても、若いうちは「職場・仕事関係の人」を選択し、高年になるにつれ「隣近所の人・町内の人」を選択する傾向がみられた。「隣近所の人・町内の人」を選択した人の割合が「職場・仕事関係の人」を上回る年代に着目すると、福井市および大阪市は60代になってからであるが、嶺南地域では50代になってからであった。

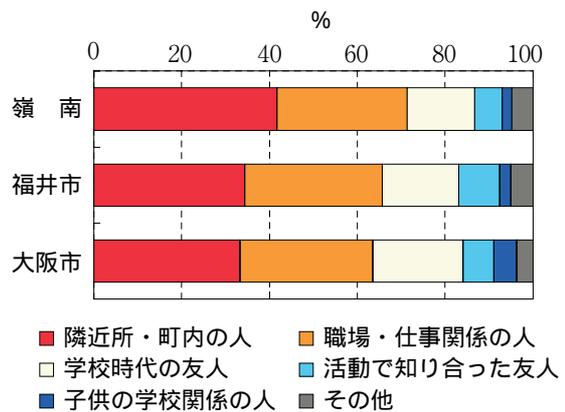


図4 最も重要な付き合いの範囲の割合(地域別)

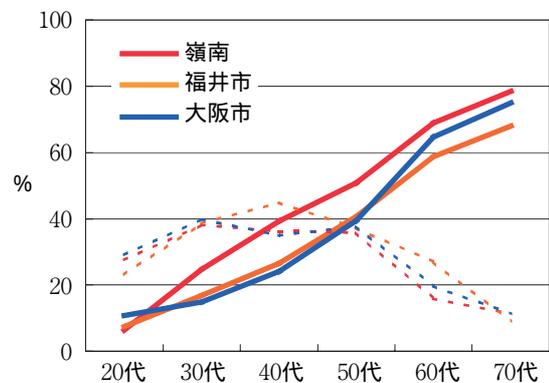


図5 最も重要な付き合いの範囲の割合(年代別)  
(実線: 隣近所・町内の人, 破線: 職場・仕事関係の人)

### (4) 自己実現因子に属する斜交因子項目と関連する質問項目の比較

図6に自己実現因子に属する斜交因子項目について因子得点の平均値を示す。いずれの因子項目についても、地域差が認められた(自己実現欲求因子:  $F(2, 2852)=27.94, p< .05$ , 科学技術信奉因子:

$F(2, 2852)=12.14, p< .05$ ). 多重比較検定の結果, 自己実現欲求因子について, 嶺南地域は福井市との間に因子得点の有意差は認められなかったが, 大阪市よりも因子得点が低いことが示された( $p< .05$ ). 科学技術信奉因子についても, 嶺南地域は福井市との間に因子得点の有意差は認められなかったが, 大阪市よりも因子得点が高いことが示された( $p< .05$ ).

以上, 嶺南地域および福井市は, 自己実現欲求因子について大阪市よりも因子得点が有意に低く, 科学技術信奉因子について大阪市よりも因子得点が高いことが見いだされた.

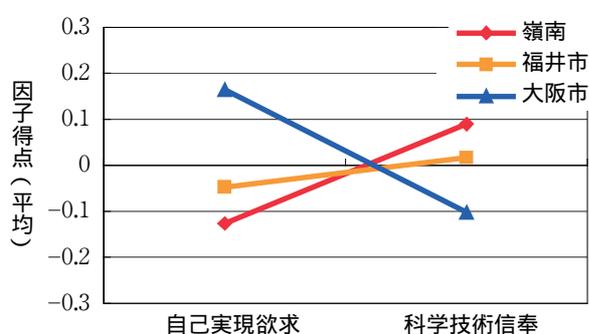


図6 “自己実現因子”に属する斜交因子得点

図7に自己実現欲求因子に属する質問項目の評定平均値を示す。「新しいことを積極的に取り入れたい」、「自分の趣味を広げたり技能を高めたい」に地域差はみられなかった(新しいことを積極的に取り入れたい:  $F(2, 2852)=0.18, ns$ , 自分の趣味を広げたり技能を高めたい:  $F(2, 2852)=0.81, ns$ ). しかし「自分の生き方や考え方を貫きたい」、「自分の個性を追求したい」については地域差が認められた(自分の生き方や考え方を貫きたい:  $F(2, 2852)=3.99, p< .05$ , 自分の個性を追求したい:  $F(2, 2852)=15.47, p< .05$ ). 多重比較検定の結果, 「自分の生き方や考え方を貫きたい」について, 嶺南地域は大阪市よりも評定値が有意に低いことが示されたが( $p< .05$ ), 福井市と嶺南地域および大阪市との間には有意差はみられなかった。「自分の個性を追求したい」では, 嶺南地域と福井市の評定値に有意差はみられなかったが, 大阪市と比較して評定値が有意に低かった( $p< .05$ ).

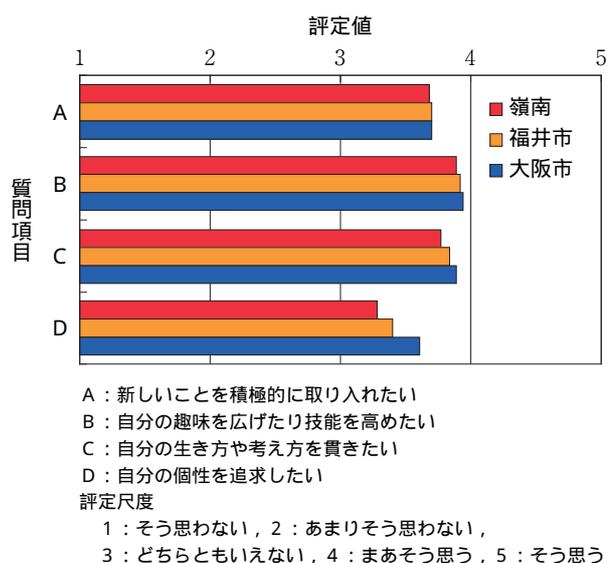


図7 自己実現欲求因子に属する質問項目の評定平均値

### (5) 開発優先因子に属する斜交因子項目と関連する質問項目の比較

図8に“開発優先因子”に属する斜交因子項目のうち因子負荷量が0.40以上の項目について, 因子負荷量の高い順に因子得点の平均値を示す. 開発優先因子に地域差が認められたが, 羨望意識因子には地域差はみられなかった(開発優先因子:  $F(2, 2852)=9.96, p< .05$ , 羨望意識因子:  $F(2, 2852)=0.96, ns$ ). 多重比較検定の結果, 開発優先因子について福井市と大阪市との間に因子得点の有意差はみられなかったが, 嶺南地域は福井市, 大阪市よりも因子得点が高かった ( $p< .05$ ).

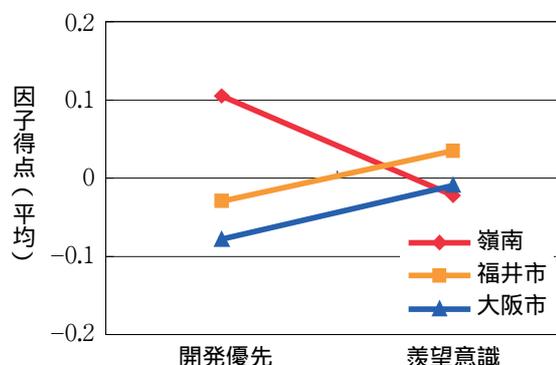


図8 “開発優先因子”に属する斜交因子得点

図9に羨望意識因子に属する質問項目の評定平均値を示す。「自分よりもよい暮らしをしている人がうらやましい」に地域差はみられなかった( $F(2, 2852)=0.71, ns$ )。しかし、「マイホームに住み、家族で夕食や海外旅行を楽しんでいる人がうらやましい」、「交通機関が便利に利用でき、文化施設や医療施設が充実した地域に住んでいる人がうらやましい」には地域差が認められた(マイホームに住み、家族で夕食や海外旅行を楽しんでいる人がうらやましい： $F(2, 2852)=4.55, p< .05$ 、交通機関が便利に利用でき、文化施設や医療施設が充実した地域に住んでいる人がうらやましい： $F(2, 2852)=30.57, p< .05$ )。多重比較検定の結果、「交通機関が便利に利用でき、文化施設や医療施設が充実した地域に住んでいる人がうらやましい」について、嶺南地域は福井市および大阪市よりも評定値が有意に低かったが( $p< .05$ )、福井市と大阪市の間では有意差はなかった。「交通機関が便利に利用でき、文化施設や医療施設が充実した地域に住んでいる人がうらやましい」については、嶺南地域の評定値が最も高く、次に福井市、大阪市の順に続き、3つの地域の間には有意差がみられた( $p< .05$ )。また、いずれの地域においても「マイホームに住み、家族で夕食や海外旅行を楽しんでいる人がうらやましい」と比較して「交通機関が便

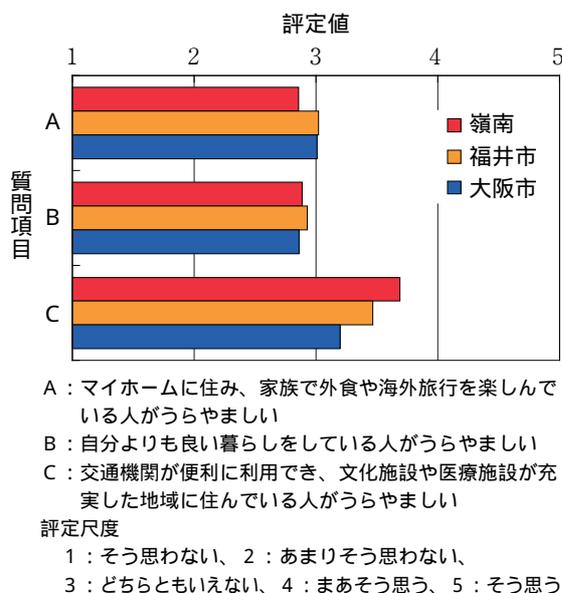


図9 羨望意識因子に属する質問項目の評定平均値

利に利用でき、文化施設や医療施設が充実した地域に住んでいる人がうらやましい」の評定値が高かった( $p< .05$ )。特に嶺南地域にその傾向が顕著であった。

### 3.3 考察

#### 3.3.1 生活環境に対する評価

嶺南地域では、文化的な生活環境に対する評価が福井市および大阪市よりも低いことが明らかになった。生活のゆとりに対する評価は大阪市よりも高いものの、福井市よりも低い。文化的環境、生活利便性、安全衛生など生活環境に対する評価はいずれも3つの地域の中では最も低い結果であった。一方で、嶺南地域では開発優先意識が他の地域よりも高く、「マイホームに住み、家族で夕食や海外旅行を楽しんでいる人」よりも「交通機関が便利に利用でき、文化施設や医療施設が充実した地域に住んでいる人」をうらやましく思う羨望意識が他の地域よりも高かった。

嶺南地域の住民は、家計や耐久消費財の所有、住居環境など日々の衣食住について平均的に満足を感じているものの、消費生活の多様性や教育文化、余暇生活をささえる社会基盤に対する評価が低く、環境整備を望んでいるものと考えられる。そして、そのような社会環境を実現するために自然環境の犠牲もやむを得ないと考える傾向が他の地域よりも高く、環境整備に対する要望が高いものと思われる。面接調査では、日々の生活に概ね満足していても社会基盤に対し様々な要望があるという結果が得られたが、質問紙調査で得られた結果もこれらを支持するものである。

これに対し福井市の住民は、衣食住だけでなく文化的な生活環境にも恵まれており、同じ県でありながら生活環境に差が生じていることがわかる。

#### 3.3.2 地域社会とのかかわり

嶺南地域は福井市、大阪市と比較して、最もコミュニティ意識が高いことが明らかになった。嶺南地

域は福井市と同様に家の存続意識が高く、地域活動への参加が活発であり、壮年期から隣近所や町内の人々を最も重要な付き合いの範囲として位置付けていることが特徴的である。壮年期は仕事と近所付き合いを両立しながら過ごしており、仕事を退いた後は近所との付き合いを中心に人間関係の変化が円滑に移行している。

嶺南地域の住民は、家の存続を軸に地域活動や近所付き合いを深めることによって集落内に緊密な人間関係を形成し、地縁社会を継承していくことを重要視していると考えられる。これに対し、福井市の住民は、家の存続を重要視する傾向は嶺南地域と同様であるが、地縁社会の緊密性は嶺南地域と比較して多少疎遠になっていると思われる。

### 3.3.3 自己実現意識

自己実現欲求因子に属する質問項目に着目すると、「新しいことを積極的に取り入れたい」、「自分の趣味を広げたり技能を高めたい」に地域差はみられなかったが、「自分の個性を追求したい」については嶺南地域および福井市は大阪市と比較して評定値が低かった。また、「自分の生き方や考え方を貫きたい」では、嶺南地域は大阪市よりも評定値が低かった。3つの地域の住民はそれぞれに自己実現欲求を持っているものの、個人を優先する自己主張にあっては、嶺南地域および福井市の住民は大阪市の住民と比較して消極的といえる。

嶺南地域および福井市では大阪市よりも、家の存続意識が高く、地縁社会を重要視する傾向が強いことが明らかになっている。また、面接調査では、伝統的な秩序を重んじたり、私生活に干渉する風潮が地域にみられることが示されている。個人を優先する自己主張は、帰属する社会との調和を阻害する要因のひとつと考えられる。したがって、嶺南地域および福井市の自己実現のあり方は帰属する社会との調和を前提にとらえていると考えられ、自己主張が積極的である大阪市の自己実現とは異なるものと思われる。

## 4. 結論

本研究では福井県が旧経済企画庁の豊かさ指標で高い評価を受けていることに着目し、嶺南地域の住民の豊かさのとらえ方について意識調査を行った。調査の結果、嶺南地域の住民の豊かさのとらえ方について以下の知見が得られた。

日々の衣食住について平均的に満足を感じているが、消費生活の多様性や教育文化、余暇生活をささえる社会基盤に対する評価が低く、環境整備を望んでいる。

家の存続を軸に地域活動や近所付き合いを深めることによって集落内に緊密な人間関係を形成し、地縁社会を継承していくことを重要視している。

自己実現のあり方は帰属する社会との調和を前提にとらえており、個人を優先する自己主張には消極的である。

## 謝辞

本研究はインタビューに参加してくださった美浜町民の多大なるご協力のもとに実施できたものであり、厚くお礼申し上げます。

本研究の遂行にあたって、社会システム研究所糸魚川直祐所長、阿登一憲副所長、竹下隆客員研究員には、多大なるご協力と貴重なご助言をいただきました。また分析に際しては、熊本大学教育学部篠原弘章教授に適切なご指導と貴重なご助言をいただきました。ここに表して感謝の意を示します。

## 引用文献

- 経済企画庁国民生活局 1998 新国民生活指標 P L I (People & Life Indicators) 経済企画庁国民生活局  
 蓮見音彦 1993 地域社会 新社会学事典第一版 有斐閣  
 森岡清志 1993 都市的生活様式 新社会学事典第一版 有斐閣